



親を思う

親を思う

石井さんは幸せだと思う。

彼とは居住地の市が主催した「話し方教室」で知り合った。昨年、ある会社を60歳で定年退職したという。現在、89歳のお父さんと85歳のお母さんの面倒を見ながら、多彩な趣味を楽しみ、悠々自適の生活を送っているようである。

私が羨やましく思うのは、悠々自適の生活のことではない。第二の人生に入った現在でも両親が健在で、その面倒をみられるというしあわせのことである。

私の両親は昭和38年の夏に67歳の母が、翌年の春に71歳の父が共に脳軟化症で亡くなった。私が37歳のときである。そのときの悲しさと孝養のいたらなかった自責の念は、今もって忘れることができない。

長生きにこしたことはないが、少なくとも私が60歳ぐらいになるまで生きていて貰いたかった。

私の兄弟姉妹は兄2人に姉1人、弟妹がそれぞれ2人の計8人である。母が入院して数日後、容体が急変したときに皆が集まっておろおろした。第一回の発作の後には病状を持ち直すこともなく、第二回、第三回と悪くなるばかりだった。げっそりと肉が削げ、まるでミイラのように小さくなった母を見るのは辛かった。最後の昏睡状態に入ってから、目を反けたくなるような苦しげな呼吸で、それが二昼夜も続いた。しかし、脈拍は強くしっかりしていて、根強い鍛え貫かれた母の根性、そして生への執念というようなものを感じた。幸い、最後には非常に安らかな呼吸に変わってくれたのが、せめてもの慰めであった。

立ち居が不自由で臥せきりだった父は、母の死後早々に長兄宅に引き取られた。父は若いときから母に苦勞のかけ通しだったので、子供達の親愛感は母に較べて薄かった。だが、母に対する後悔の念は、子供達の父を思う気持ちを一層強めることとなった。

しかし、それから7ヵ月後、父は母を追うように亡くなった。

当時、私は公務員になって約10年、一家4人の生活を支えるのが手一杯という状態であった。また、「両親は兄と姉がみているだろう」という、甘えと安心感があった。そんなことでつい親孝行らしいこともしないうちに、親の死という取返しのつかない事態を迎えてしまったのである。

今になって「気くばりが足りなかった」とか、「温泉や旅行に連れて行けばよかった」などと、悔やんでみても後の祭りである。「いつ迄もあると思うな親と金」、「墓にふとんは着せられず」という諺の正しさと、そんな、悔いを繰返している人間の習性を、私自身しみじみとあじわったのである。しかし、思い出すたびに後悔しては気が滅入るばかりである。そこで石

井さんに出会ったことをきっかけに、気持ちを切り換えることにした。

その一つは、私が親にしてあげられたことや喜ばしたことを思い出し、「私もこれだけのことはやった」という自信を待ち、自責の念をやわらげたいということである。

それは一家が父の仕事の都合で、韓国（旧朝鮮）に移住していたときのことである。戦争のさなかの昭和13年から20年までの間であった。住んだところは京城と仁川のほぼ中間。果物の産地として有名な村であった。私は移り住んで3年後、14歳のときに旧制中学を2年で中退し、それから約4年間、朝鮮鉄道局の仁川機関区で働くこととなった。兄2人が戦争に取られ、父は病身ということで、両親と弟妹4人の生活が私の肩にかかってきたのである。

仕事は蒸気機関車の整備で重労働だったし封建的な職場だったから、随分と辛く苦しい思いをした。思い余って転職を考えたこともあったが、収入の良さがこれを許さなかった。給料は封を切らずに母に渡す。母は押し頂いて一旦収める。私はそれから決められた小遣いを貰うことになる。現代の親子関係では見られないことだが、当時は当たり前のことだった。17歳で機関士になったときの両親の喜びは大きかった。

昇進だということもあったろうが、罐焚きである機関助手の辛さから開放されることを、心から喜んでくれたのである。しかし、私の気持ちは複雑だった。この時期まで、はやる心を抑えて兵役志願を延ばしていたからである。

18歳のとき、私は翌年に迫った徴兵を意識して、少年飛行兵を志願し奈良の陸軍航空学校に入校することとなった。父は「兵隊に取られるのは、兄二人だけでたくさんだ」と強く反対した。しかし、母は「恒雄にはこの4年間苦勞をかけた。どうせ来年兵隊に取られるのだから、最後はこの子の思い通りにさせてあげたい」といって、父を説得してくれた。

京城から韓国最南端の港町・釜山までの時間は、当時、急行列車で約12時間かかっていた。父は弟を連れてそこまで送ってきてくれた。車中での父は終始無口で単行本を読んでいた。その姿は如何にも寂しげだった。幸か不幸か、戦争はその後8ヵ月で終わった。

戦後は戦中の経験が生かされず一からの出直しで、私の20代・30代前半は世の荒波を乗り切るのに精一杯の時代であった。このため、37歳のときまでに親にしてやれたことといえば、韓国で一家の柱となって働いていたときのことだけであった。いささか気が咎めるが、これを私の唯一できた親孝行として、今後の生きる支えにしていきたいと思っている。

もうひとつは、親の死によって体験した後悔の念を、今後にかさなければならぬということである。妻の両親も他界しているので、その対象は妻子ということになるだろう。妻子に対してはこれまで決して優しい夫、父親ではなかった。わざときびしくしたこともある。それも、世の荒波を乗り切る力を身につけて貰いたかったからだ。

しかし、妻も50を過ぎ子も一本立ちとなった現在、私の指導的役割は終わったとみるべきであろう。そこでこれからは同じ悔いを繰り返さないために、妻子に対し、なるべく寛大に接しようと心に誓った。それには私の性格上、相当な努力と忍耐がいることと思う。遅まきながらこれが

できて、私ははじめて一人前になったと言えるのであろう。